

わい談をはじめた。三上さんは金木町を代表する知識人でもあり、郷土史の研究者でもあった。

話の発端は、『小山内君は嘉瀬の奴踊りの保存会をつくって、普及に力を注いでいるそうだが、奴踊りは元をただせば、喜良市が発祥地である』という。私はこれを聞いて、びっくりした。

『しかし誰も、喜良市の奴踊りだとは、いわないではないか』と反論したが、三上さんは奴踊りは嘉瀬のもので結構だが、これと同じことで、喜良市娘に嘉瀬若者の話があると、話題をかえた。

三上さんは、『私の若い頃は、喜良市若者に嘉瀬娘であった』という。これは喜良市の若者が、嘉瀬の娘たちを引っ張ることが流行したので、そう呼ぶようになったとのことである。それでは、今は嘉瀬の若者が、喜良市の娘を引っ張るのかと、大笑したことがあった。

三上さんによれば、どこの男も、女も、別に美美女という意味ではなく、『づる助か、助平の別称だ』というのであった。

木下清

嘉瀬村も昔の娯楽は、盆正月、鎮守の森の村祭りしか機会が無かったことであろうことは、若い男女の交際も、盆の夜、盆踊りにエネルギーを発散させ、踊りの中に語らい、恋も芽生えたのでしよう。津軽の盆踊りは社交場でもあったわけで、近郷近在の村々に若者が、ワッパが（一日の決められた農作業量）仕事も、あとの楽しみのため苦にならず、群をつくって他村に出かける習慣があった。

嘉瀬と喜良市、どこかよく似た村で、金木のように大きな商家もなく、泥臭い人間の集まる村で、チョットいふりこぎの金木と肌が合わず、自然発生的に肌が合う喜良市と嘉瀬の男女の交際が多く、地理的環境と生活様式から、似た者同志の村から生れた言葉と決論する。要は若者同志の交流が励しかった。

天正十五年、金木が為信に味方して、嘉瀬喜良市を攻めて、村が全滅の浮目に合った事蹟から、金木から嫁婿となるな、金木と付き合うなと、腹にあったのも起因する。



嘉瀬十年とは？

私達嘉瀬ふるさとを探る会で、何時も議題として討論されるのが『嘉瀬十年』の語源でした。

それでは『嘉瀬十年』と言われた言葉の意味は、他村からみて嘉瀬は十年、村の生活文化がおくれている貧乏村とさげしまれ、馬鹿にされた言葉であったのか、または他村からみて、文化的に教養が十年進んでいる進歩的な部落として、羨望のまるとして、『嘉瀬十年』と言われてきたものか？

あなたが実際体験してきた、あなたの感触によって、また嘉瀬の古老から聞いて、あなたなりに『嘉瀬十年』という言葉の意味と語源について決論を出して下さい。

沢田薫

これはあくまで私論である。

私は、嘉瀬十年とは、嘉瀬十年遅れていたと採りたい。いつの頃か、嘉瀬にはドス系統が多いと言われていた。今で言う頼、ハンセン病である。だから嘉瀬は、他町村から嫌われ、嘉瀬から他町村へ嫁入れも出来ず、又他町村からも嫁が来なかった。そうなる必然的に部落内だけの結婚となった。余り大きい部落でなければ、血族結婚もあつたらうと想像される。

そのように他町村から村八分的な制裁を加へられ、多分に排他的となり、他町村との連帯がなければ視野も狭くなり、考えも保守的となる。

そして、他町村への協調性もなくなり、敵愾心だけが湧いてくる。他町村からも又必りである。

その辺から嘉瀬十年が出たのではないか、私の妻が嫁いで来る前、妻の叔父から、嘉瀬はドス系統だからと言われたそうである。今文化的な嘉瀬から、そんな汚名は一日も早く返上したいものである。

木村治利

十年一昔、永い永い月日である。『石の上にも三年』という諺がある。不安定な生活の中にも三年我慢すれば、必ず何かの報いが訪れるということである。これが石の上にも十年となれば絶望を意味する。

『嘉瀬十年』は、どうしようもない、絶望的なさげすみの表現だと思う。『苦界十年』ということばがある。もともと仏教語で、生死苦悩の多い、この世界を苦海といったのが始まりだが、遊女、廓の世界

を苦界といった。

江戸時代には、吉原の遊女の年季は十年であった。貧農の女子は十才ぐらいで廓に身を売られ、二十七才の年季まで働かされた。男の子は借子である。嘉瀬に、こんな貧農が多かったのではなかったのか、それが明治三十九年八月御倉破り事件が起り、農民たちは、社会的に大きな汚名を着せられた。

『嘉瀬十年』とは、このときの悲難の中から生れた言葉ではないだろうか。

木立民五郎

大正の初期までは、この言葉が無かったと思う。ノド自慢、力自慢は部落にみながっていた。生活密度がひくく、教育育成の風調もなくてカセ独特の言葉使いは、昭和の初期まで長く続き、一步村外に出ても肩身のせまいものだった。有力者、資産家と称される家では、学校の先生を娘婿に迎えることを至上の誇りとし、村外からこれを移入した。移入された学校の先生は、嘉瀬に来て、子供達の津軽弁丸出しと、尚カセ弁の混濁にびっくりした。十年、否二十年遅れている村だと思つた。口癖に十年遅れているといった。学校の先生から発せられた言葉である。何につけ、まづいことが出来ると、嘉瀬十年の言葉でかたづけられた。親達もいつしか、それに思い込む様になった。

子供に教育、それが終戦後急激に増え、三度の飯を二度にしても、子供を学校に仕込む風習が漲った。生産技術が改良され社会経済が、出稼ぎ収入と重なって、今や昔の嘉瀬でなくなった。

進学が一年毎に伸び、若い人達が都会に接触するようになって嘉瀬

弁は遠い昔言葉になった。学校教員、警察官、県庁職員、営林署の役員、会社事務員、其他サラリーマンの数は、他町村を圧する数になった。今や嘉瀬の若い人達には、何のことか知らない人ばかりである。何んのこともない一時期、嘉瀬に移入された学校の先生から申し込まれた、嘉瀬人への侮りの言葉であり、生活民度のあはれな言葉であったと思う。進歩的語源とは考えられない材料ばかりの嘉瀬であった。

† 原田万治

嘉瀬十年とは、決して、進取性に富んだ嘉瀬の事柄ではなく、侮蔑とさげすみの代名詞で、誰が、何時頃、どこで、何を指して云った意味の言葉か、今の私には解明しうることができない。

昨今に於ては、この言葉も、死語に近い存在になっているだろうがただ、時としては教育者の陰の言葉として存在も、ときたま使用されているようですが、ともすれば、この侮蔑の嘉瀬十年という言葉も、教育者のなから生れた言葉であるかも知れない。

人の渾名とか、その人を揶揄する名とか、或いは、それに準じた家の名は、熟慮の末に、意識的に付けたものではなく、感覚的に、咄嗟的に、あざ笑いの種としてよく付名されるが、この『嘉瀬十年』も、あまりにも低劣な、後進性にあきれて、誰かが載名したのではないだろうか。

また、嘉瀬の過去においては、嘉瀬言葉といわれるあまりにも下卑な、悪い言葉遣えがみられ、津軽のなかでも、突出した、独特な部類に入るのではないか。

一般の人々は、経済的に弱く、低迎から起き上がれない、社会的要領で『嘉瀬十年』という言葉が聞かされたが、低学年の頃は、何んのことか、全然わけが分らなかった。

四年生（昭和八年）の時、村の中央部を流れる大堰の橋が改修された。この橋を鳴海校長が更生橋と名づけた。橋が落成して間もなくの頃、私は何人かの友だちと、白墨やクレヨンで、『こうせいばし』だの『太郎と花子』だのど、手当り次第に落書きをした。

翌日、朝礼のとき、校長先生に、私たち犯人が呼び出され、『きょう中に必らず消すこと』を言い渡された上、こんないたづらを村々の人に見られたら『嘉瀬十年』と笑われるといわれたことがある。

このとき、はじめて嘉瀬十年という言葉の意味の一部が、わかったような実感があつた。

† 山中正津

『十年一昔』と云う。しかし嘉瀬十年の十年は何時の間にか嘉瀬の人たちから忘れ去られようとしている。

津軽の歴史は凶作との闘いでもある。特に金木新田の一寒村嘉瀬は貧しく、生活のためには学問不要、人は労働力でさえあればよいという風潮が強かった。

農家の二・三男は『ワも田畑を持ちたい。自作農になりたい。十年後には見ておれ』と牛馬の如く働いた。

明治二十六年組合立金木明治小学校が創立開校され、金木・嘉瀬・喜良市・武田・中里・内写・相内・稲垣各村から生徒が入学したが、嘉瀬からの生徒はどうしても学力に差がつく。嘉瀬の生徒たちは『勉強はできなくても十年後を見ろ、学問は飯の糧にならない。』と強が

因のなかで、村の中での婚姻関係。融通のきかない、一途な村の歴史性。いろいろなことが積み重ねられて、嘉瀬の悪い部分の顔が、『嘉瀬十年』というさげすみの言葉で、近隣の他村からみて、定着した時代があつた。

だが私は、今は違うということをつけ加えておきたい。

† 木立久二

嘉瀬十年と聞くと、決して喜ばしくは感じない。嘉瀬に生れ、嘉瀬に住んだ誰もが、その見下げられた言葉の響きを。

嘉瀬人は他村の人より正直であり、しかも広大な耕作地から出来る食糧で、自給自足ができ、そう云う中で、他人に気嫌もなく、また村も大きく、嫁を貰うにしても、村内での行き来が多く、他村との交流が少ないため、必然的に他村の出来事も解らず、他村の者に耳をかす事もなく、村内のことしかわからないため、他村の人から見れば、なんとなく排他的に受け取られたのが、何かの機会に『嘉瀬十年』になつたのではないか。

嘉瀬の歴史を探ってみると、嘉瀬は文化的に、決して他村よりおくれた十年で無く、むしろ、現在は十年先んずているように思う。

† 小山内嘉一郎

私が小学校（昭和五年～十年）の校長は鳴海民之助先生であつた。

鳴海先生は、その後二十年も嘉瀬小学校の校長であつた。

私の子どもの頃は、一家の主人と同じで、校長先生は生きている間変らないものだと思つてた。そして在学中に何十回となく、折にふ

りを云つた。

それから『嘉瀬十年』と云われるようになった。

生活様式は都会並み、学問も高校・大学に学ぶ人が多くなり、小卒・中卒が希小価値といわれる現在は『嘉瀬十年』の言葉が聞かれなくなった。

† 木下清一

私の体験、それも昭和の十五年。袖口が鼻汁でテカテカになったハンチャに継張の股引、足はとみればアシタガ（藁草履）。友達連中も皆同じで、連れ立って金木の朝日橋までくると、金木の童子連中待ち受けて石をなげ『嘉瀬の乞食童子コ』『嘉瀬十年』『嘉瀬十年』と馬鹿にされ逃げ帰つたことがある。馬鹿にされたように聞こえた『嘉瀬十年』の、そのものの言葉の原因は何んだらう。

天正十五年大浦為信（私の目からみると、私達の郷土を侵略した悪の親玉）が嘉瀬に攻めてきた。その時、浪岡北畠の一方の部将であつた金木代官津島太郎左エ門が為信に寝返り、攻撃の先鋒にたち、嘉瀬に攻めてきて、神社を焼き、住家を焼き、部落の大半の人々は殺された。為信津軽を統一、津島太郎左エ門も勲功により金木代官の身分が保障。当然敗者の生き残つた嘉瀬の住民は、田畑を没収され、津軽藩家臣の知行地に組みこまれた。

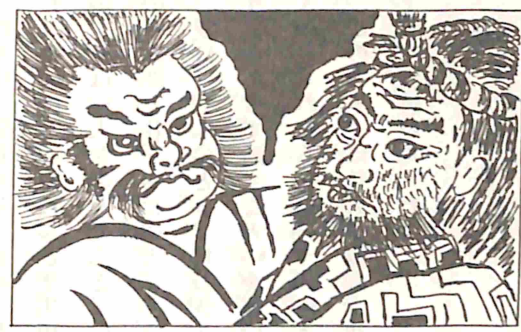
また津軽藩は新田開発に伴つて、家臣に田畑屋敷を与え、郷土として開拓にあたらせ、これが後に豪家として育つて行くところからして在来からの嘉瀬の住民の大半は、水呑百姓が孫子の代まで続いて、貧困からはいあがる事ができなかった。

屋根は藁葺、土間に藁を重ねて敷くだけの居間。戸は無く入り口に『かけむしろ』をさげて寒さをふさぐ住居の貧しい生活は、藩政時代から昭和の初期まで続き、豪家（物持ち）と称される豪家は嘉瀬には何軒もなかった。私は貧農からきた『嘉瀬十年』と決論する。

また向学心にもえる若者と、生活の貧困から、その芽もつまった結果による無教養さを馬鹿にされたことであろうことも『嘉瀬十年』の語原の因子であろうと解す、私は遠く天正の時代にさかのぼり、金木からみた嘉瀬は『嘉瀬も利口に立廻って、強い者に味方すればいいものを、ジョッパリで物知らずばれ集ばって居るからだ。馬鹿の見本が嘉瀬だ』と、さげしまされたであろうことが、天正の時代から地の底

を張って聞こえてくるようでない。

今は町村合併され、金木と嘉瀬の部落としてのひだたりが無いもの、まだ私の胸の底に残る何かがあるのだろうか、金木に負けてたまるかと言う一念からか、金木本町より十年先を嘉瀬は歩んでいるということを見てか、親と子を結ぶ出稼ぎ対策の文集に着想先鞭をつけた嘉瀬ふるさとを探る会が結成されたのも、会員が協力し合って発行した会員誌『かたりべ』も、本町より十年先を歩む嘉瀬という目標が、会員みんなの底辺にあったからにはかならない。（部落意識が強いナアと言われれば、それまでですが）



私達の祖先 (先住民)は アイヌ族か 蝦夷人か？

津軽に關係する歴史書では、アイヌ族は下北半島および津軽半島の蟹田、三既、今別地方の海岸部にアイヌが定住す。アイヌ部落が存在したと記録され、天正十五年大浦為信が加勢城、嘉瀬東館、西館を攻めたとき、津軽一統誌では嘉瀬城主八重・佐助はアイヌの酋長としてゐる。とすると、八重・佐助がアイヌ種族としたならば、その支配下にあった嘉瀬・喜良市にもアイヌ部落が存在していたらうことは論をまたないこととなる。また私達の祖先はアイヌであるということになる。

あなたなら、私達が居住している嘉瀬の祖先（先住民）はアイヌである。いや津軽古来からの先住民である蝦夷人であると、いづれに決定するか、東北および津軽に關係する書籍を参照して、あなたなりの私見でもって、答えてください。

沢田 薫

遠い縄文時代の後期にさかのぼる。私達の祖先は阿曾部族（阿蘇部）

である。山狩狩猟民族であった阿曾部族は、遅く来て海から来た津保化族と長い闘いの末敗れて、同族化され荒吐族となったが、阿曾部族

の子孫として、先づ今も私達が日常使っている阿曾部族からの言葉を佐治芳彦著『謎の東日流外三部誌』より二・三引用してみたい。

『このツボケ童コノ』 祖父母から、父母から、この言葉を投げられて、叱られた気憶はありませんか。今も言われているこの言葉から私達祖先阿曾部族の闘い敗れても、尚津保化族に対する怒りの声だと受けとれませんか。

次に津保化族の神、ホノリ神は、男女両性の神で、男神は加毛（ガモ）と言われ、女神は伊辺（イペ）と言う。このホノリ神が『伊辺加毛神』として祀られ、下って『オシラ様』となると言うが、私達が、今も性器の隠語として使われているイペガモが出てくる。

まだある。父はアヤであり、母はアパと言われていた。もう一つある。葬式のことを、私達は『ダミ』と言う。これも阿曾部の言葉である。

以上言葉の引用から、私達の祖先は、この東日流に縄文時代から根づいた阿曾部族と信じたい。

木村 治利

古事記や日本書記の中に、東北の住民を蝦夷と記録されている。大和朝廷は関東一円を体制に組入れ、東北を征服しようとしたが、陸奥と出羽の住民は頑強に抵抗し服従しなかった。すなわち大和朝廷が化外の『異民族』に使ったのが、蝦夷という蔑称である。

蝦夷は狂暴で、しばしば良民を襲うという理由が、東北討伐の対象であった。嘉瀬村でも、アイヌの酋長八重・佐介が幡居して、往来する人々に対し危害を加え、おびやかしたという記録がある。かれらにあたまたから蔑視した征服史観がある。

木立 民五郎

八重・佐介は城を守り、村人を守るため、侵略してきた大浦軍と戦った忠臣であった。蝦夷は陸奥、狄は出羽のエミンともいわれる。このほか狂狄、賊、実狄、蝦賊とも呼ばれた東北人も、大和民族にはかならない。

アイヌは北海道、樺太、千島に住み、蝦夷とは体質、風俗、宗教、言語も異なっている。

原田 万治

私達の祖先は、アイヌでもない、蝦夷でもない。たしかに嘉瀬周辺にはアイヌも、蝦夷も住んでいたと思う。併し現在の嘉瀬住民は、日本海を北に流れて辿り着いた、大和民族の中央権力から追れた、謂うなれば逃亡民族と思う。

こゝでアイヌ族を討ち、蝦夷を亡し、祭神の中心行事を興し、農耕文化の『道』を開いたのが、私達の先祖と思う。

アイヌは滅びゆく民族の宿命を背負っているといわれますが、種の保存という見方からすれば、単一種族だけの維持は、種の退化を余儀なくされるという。

それは、アイヌ族自体の自律作用で、他種族を拒んだか、それとも、他種族がアイヌ族を敬遠したのか、その辺が微妙なところでしようが、私達の祖先はアイヌ族とは違うと思う。

先史時代には、私共の地域にも、アイヌ族は定住したわけであったろうが、種族の力関係で、一部はわれわれの祖先と同化しても、大部分は追いつめられ、移動して、この地から海峡を渡って去っていった

七福神物語縁起解説

佐野 洪

か、自然の猛威と病いに抗しかねて滅んでしまった。
現代の医学からみても、アイヌ族の骨格と私達の体の骨組みとは、
相当な違いがあるといわれる。

私達の祖先がアイヌ族でないとすると、蝦夷人になるが、それも日
本の西の国、倭人から見た対語で、その呼称の前には、津保化族と、
阿曾部族で、外三郡誌によれば、阿曾部族が私達の先住民であるとき
れている。

ただ昔からの嘉瀬言葉のなかには、アイヌ語に近い言葉がみられ、
それも、多少転化して使用されたことは間違いない。

従って中世に於ても、とり残されたアイヌ族と、私達の祖先は、共
存したであろうと考えられる。

木 立 久 二

私達の祖先の解明は実に難題である。それは我々ふるさとを探る会
の終局的な目標の一つに必然的に加わるからであると思うからで、
しかし私共が今まで探った(古書伝承)ところで、諸説を述べ合う事
も、大変意義がある。私見を表わしたい。

津軽為信が加勢城・東館・西館を攻撃した以前に数種族が居り、八
重佐助がアイヌ種族の酋長であったとするが、その頃はすでに各種族
の交流がなされ、混血族となっていたと思う。

津軽はたいへん自然に恵まれ、狩物が多くあったとしても、各種族が
合い競って、種族を維持出来る程の食物があったのか。中山山脈の山
裾に先住民族の住居跡(タテ穴、ヨコ穴)があると聞くが、それが発
見発掘されてくると、その解明が出来ると思うが、今のところ私は、

嘉瀬先住民族は蝦夷であるように思う。

木 下 清 一

加勢城の主長八重・佐助がアイヌ族であったならば、坂上田村麿呂
が津軽を征伐してきたとき、蝦夷征伐でなく、アイヌ征伐にきたとい
ことになる?。また歴史学者や歴史書では、室町末期、戦国時代以前
にできた私達郷土の館、柵跡をアイヌタテ跡と書いている。ならば大
和朝以前から住居したとき、中央政権の政府から幾度となく劫掠さ
れ続けてきた蝦夷人はどこに消え去ったのか?。青森県内で発掘され
ている先住民族の住居跡の様式と北海道のアイヌ部落の住居様式が違
うという事は?。

私は、私達の祖先は、東日流外三郡誌にでてくる、津保化族、阿曾
部族、荒吐族の末裔蝦夷人であると決め、中柏木、嘉瀬、喜良市の中
山山脈の裾野を領していた八重・佐助は、アイヌ族と人種を異にする
純粹の山岳民族、蝦夷人の末裔の部族の村長であって、私は、往時大
和朝に永年にわたって抗戦し続けてきた蝦夷人を祖とすることをほこ
りとする。

『かたりべ』投稿について

嘉瀬出身者で、他の市町村に居住し『かたりべ』に投稿希
望の方は、『西北五地方の古代中世期の津軽』『私の嘉瀬・
遺蹟随想』等の史的価値あるものに限り、四〇〇字詰原稿用
紙三枚以内で投稿して下さい。但し稿料は御用捨の程を。

一体この福神の起りは、或時徳川家康公が天海僧正に『

国を富まし、家を榮えしむる法は如何』と御尋ねになると
七難即滅、七福即生萬民安楽、帝王観音と云う、仁王經
の文をもって答へられた。そこで、その七福とは『何ヂャ
』と問はれる。七福とは、寿命 有福 人望 清廉 愛敬
威光 大量と答えたので、公は大いに喜び、早速画師狩野
氏に命じて、之を画にしたのが所謂七福神だと云うこと
です。

寿老人は、どことなく、アカ抜けして無慾そのものよ
うな面持で、枝の先に一卷の軸物を掲げ、前に鹿を待らせ
て、ゆうゆうと座って御座る。彼は南極の寿星と云って、
人間の寿命を司る星を人格化したもので、その軸物には人
の寿命の長短をちゃんと記してあると云うから恐ろしい。
兎に角長命したい人は、此の寿老人にあやかって、怒った
り、イライラしたり、クヨクヨしたりしない様にすること
です。

いくら長命しても、福徳がなければつまりませんから、
神徳の神が控えている。この大黒様は、大國主命とか、大
巴貴命と云いますが、実際は、印度の『マカカラ天』で、
軍神と福神との二神あるのですが、我国では、福神として
祀るだけです。大黒様は、堪忍袋をしっかりとつかみ、精
出して打出の槌を打振り、米俵(財産)を大切に守り、む
やみと上など見ずに、頭からスッポリと頭布を被り、朝か
ら晩迄全ったく真黒になって働けば、福徳が集まるに定ま

っている。大黒様の歌に次のようなのがあります。

わが槌は、宝打ち出し槌でなし、のらくら者の頭打つ槌
福祿寿は人望の神で、これは支那の道教で祀る天南星の
化神です。福徳が具っても禄がなければ人望は得られませ
ん。人望のあるところ、おのずから名譽も集まるものです。
即ち氣品を高く持ち、人より一段勝れよかしく頭をあん
なに長くしているのです。

また恵比須様は日本の神様で、『ホホデミ命』とも『コ
トシロ命』とも云います。いくら金が山ほどあり、福徳共
に具っても、無暗に慾深くしてはいけない、と云うので、
自ら小窓の糸を垂れて、一尾の鯛に舌鼓を打つ、之は足る
を知って貧ることなく、その分を安んじて天職を楽しみ、
いつもニコニコ暮す、是ぞ誠に正直潔白な表現です。

辨財天は女神になって居ますが、辨財天女経に出ている
印度の水神で、元来正体は蛇ですが、蛇ではイヤだと、之
を琵琶にかいたもので、智恵と辨舌の神でしたが、何時の
間にか愛敬の神となり、これを女神にしたのです。

次の毘沙門天は威光の神で、多聞天と云う印度の神です。
頭に金の甲を被り、左に宝塔、右に鉾を持ち、ニラミ給う
は威光のあるもの、私達も柔和の中にも凛とした威光が欲
しいものです。

布袋和尚は唐の契此と云う僧です。大きな腹を使々と突
き出し、大きな袋を肩にかけ、右手にウチワを持って、ニ
ニコ笑っている。太っ腹な度量の大きい真の人格者です。

民謡愚考

木下清一

津軽地方の民謡の系譜は、京の文化が、北陸・日本海伝いに北上するとともに、海路、船頭衆によって、津軽の内陸部に定着して、津軽の民謡として育った源と、陸路、京から関東、東北と、陸路による物資の交流に伴って、旅芸人の口伝により伝承されてきたものと、二つの流れを基にして、民謡そのものが、それぞれの土地に根をおろしたとされる。

民謡そのものの完成された成立過程は、いずこの国の、自慢の唄でも、その時代、時代の社会情勢の変化に伴って、成長発達して、その土地の、独得の民謡に開花したでしょう。

『嘉瀬の奴踊り』の唄と踊りの源流は、盆踊りからか、それとも田植踊りから成立したのか、私なりの愚見を述べたい。

まず、嘉瀬に、先に述べたように、海路日本海を北上して各地方の民謡を総合した唄が、その土地土地の人々によって、脚色創作され中里なら中里の、金木なら金木の、嘉瀬から嘉瀬の唄、踊りとして土地のものとして定着してきたのが本当であろう。

津軽新田開拓のおり、讒言され、配居の身となった主人伝右エ門を慰めるため、従僕徳助が速興的に踊ったのが、奴踊りの源流であるということが一般的に伝えられてきたが、私は踊りそのものより、私は唄われる歌詞に重きをおきたい。

へ嘉瀬と金木の 間の川コ

石コ 流れて 木の葉コ沈む

へおれのかぐじの タタラビ花コ

昼間しおれで 夜に咲く

津軽の藩政も三代になると、士農工商の身分が確立され、諸藩政ができ、藩の体制が完成をみて、百姓は、永代百姓として、百姓からはいあがれない身分制度が……。

出来秋になると、高い年貢を藩倉に納め、地主に借地の小作米を差出しと、その日から自給自足の飯米にも、ことかく生活をしいられてきた嘉瀬の小作人。

それでも、どっこい嘉瀬の農民は生きてきた。何んの望みもない、あしたの生活を、農民は何に娯楽を求めたか、神社の祭礼や、盆踊りに求めるしかなかったであろうことと、野良で声を張りあげて、自分のうさを晴らすしかなかったであろう、とするならば、『小石流れて……』と、代官や、藩の仕方を怨んでの、農民が唄にたくして批判した精一っぱいの抗議の怨み唄が元唄で、今で云う世相川柳的要素から発祥したとみる。

また一方嘉瀬人は、津軽人独得のユーモア精神の旺盛な人達が多かったのでしょう。

稲妻ピカピカ 雷ゴロゴロ 意気地なし親父

ばら株さ ぶささて 千両箱ひろた

と、津軽ゴダグ話に出てくるような歌詞も生れてくるところをみると苦しい生活の中からも、決して暗くない、明るい、モツケ気の多い、創作的文化の要素が多分に村の雰囲気の中にあつたことが、歌詞の表現から、底抜けに明るい郷土性を発見することができる。

『嘉瀬の奴踊り』の唄の源流は、あくまで、農民が、野良で、馬の鞍や、鍬鎌の柄をたたき、調子をとりながら、自然に向って、田の面

に唄い流した、農民の作業唄から変化したものと私なりに決論したい。

それが元唄に、盆踊り唄、座敷唄に改良され、唄に合わせて踊りが振り付けされ、現在のように完成された、嘉瀬奴踊りができあがったとみる。

なぜなら、嘉瀬の奴踊りは、今様、猿楽、能のように、時の為政者に保護され、支配されない、嘉瀬の農民が永年にわたって、土の中から、一つの完成された芸として育てあげてきたからにはかならないからである。

郷土を探る民謡特集

奴踊り芸能成立過程

木立 民五郎

配居の身、伝右エ門を慰める、従僕徳助が踊ったことは、昭和十九年戦時中、青森図書館長吉岡龍太郎が合浦公園で、県下芸能大会を催し、その際、嘉瀬から『奴踊り』が所望され、出来れば紹介のため、『奴踊り』の由来が欲しいということになり、当時村長職にあつた私が、役場職員であつたデネドの鳴海万次郎、その他古老からきいた話を、創作的にまとめ、当日の大会に出したのが、そもその由来になつている。

唄に三味線を入れたのも、小田川ダム期成当時、県から田村農地部長が、金木西沢旅館に来た時、余興に御披露したところ、踊りの伴奏として、唄だけでは一寸淋しいネと云われて、即興的に三味線を

入れて見たらと、鎌田稲一に話したら、『よし』というんで、叩いてみたら、踊りも一段と冴えて、爾来それが行われて来たのが現況である。

奴踊りは、田植え踊りでないことは確かと思う。田植え時は、虫送りでせいっぱいの百姓の祈りが行事化されて来たし、奴踊りは盆踊りとして取上げるべきと思う。

ただ最近、自分四十年前以前想像した、従僕徳助が、主人を慰めるために踊ったア、踊りでないと、考えを変えるようになってる。

盆の一夜、酒に酔った部落の団が、槍持ち、鉄箱をかついで、道中奴の舞い姿を、まねて踊ったのが、きっかけで、一つの踊りに発展

し、それが盆唄のはしりとなり、奴踊りが出来上ってきたのでないかと。

黒石郷土史をみれば、津軽藩分家の黒石藩の昔、浅瀬石川の流れを唄って、同じ農民のレズスタンスが唄われていた。

郷土を探る民謡特集

逸子踊り

小山内 嘉一郎

嘉瀬には、『逸子踊り』という盆踊りがあることは、どなたもよく知っている。ところが『奴踊り』は有名で、今日では津軽民謡の中でも『奴踊り』は主要な位置を占めている。

『逸子踊り』は世間に余り知られていない。嘉瀬には昔から、『ただ踊り』『逸子踊り』（俗にいつ踊りという）『甚句踊り』『奴踊り』という順序で踊る習慣がある。ひと通り踊って、時間にゆとりがあると、再びこの『逸子踊り』を踊る程、みんなに愛好されてきた。踊り方は、『奴踊り』よりも簡単で、テンポが早く、流暢で踊り易いのと、唄もまた、唱歌でも、歌謡曲でも、結構踊りに合って、初めての人たちにも、直ぐ踊れるのが魅力であろう。

逸子踊りには、『逸子唄』という専用の唄があった。昔は、これのみんなが歌った。特に若い頃の鎌田稲一さんは抜群であった。兄の稲辰さん、小松一声さん、鳴海勝雄さん、成田善蔵さん、内海徳一さん、小山内直七さん、津田半蔵さんが、掛け合いで歌って、村の盆踊りを盛りあげた。

昔は、娯楽も少ないので、お盆中踊っても満足できず、送り盆を一

週間も踊ったり、当時の青年村長木立民五郎さんが、先頭に立って踊ったのも忘れ得ない思い出の一頁である。

さて『逸子踊り』は、いつ頃から、誰が踊りはじめたのか、これを探ることも意義あることと思われる。ある人は、奴踊りと同じく二・三百年前の昔から、嘉瀬の農民たちが、うき晴らしと慰労のために唄ったり、踊ったりしていたという。始めは、ただ踊りや、他の盆踊りと区別がつかないような踊りであったが、それを桃（津軽民謡の開祖と云われる黒川桃太郎）が、今の踊り方にしたという。唄も桃と鎌田さんが、改良したとの話もうなづけるのである。

『奴踊りの民謡碑』を八幡宮前に建立した、東京在住の民謡研究家湯本正美さんや、木村嘉瀬ふるさとを探索会の会長さんによれば、『昔、逸子という美女の悲恋物語りが秘められた民謡で、奴踊りをしのごものである』と絶賛を惜しまない。

六年前に、全国民謡大会高令者の部で、成田善蔵さんが、この逸子唄を歌って優勝したとき、湯本さんが協会の有力な役員で、ふるさと事情に明るいこともあって、強力に『逸子唄』を推挙して、見事に

栄冠を勝ちとったのである。

昔からあった『逸子踊り』は、当然そのまま残さなければいけない。

近年この逸子踊りを、更に改良して、舞台用に踊っているグループもある。奴踊り保存会があるのだから、今度は逸子踊り保存会があってもよいのではないかと。あるいは、奴踊りと逸子踊りを総合して、

嘉瀬盆踊り保存会でもよい、要は後世に、これを残して、民謡を通して、村の歴史がより多く解明されることを願うからである。

郷土を探る民謡特集

嘉瀬の奴踊りと歴史的背景

木村 治利

「嘉瀬と金木の間の川コ 石コ流れて木の葉コ沈む」

痛烈な風刺を込めた嘉瀬の奴踊りの歌詞である。『石コ流れて木の葉コ沈む』とは、世の中逆さまだ、道理の通らない世相を正そうとする津軽農民の真髓を物語っているようだ。今から二八〇年前、津軽四代藩主信政の時代、農民は頻繁に起る凶作と開発工事のため、貧苦のどん底におち込み農奴として虐げられていた。

その抵抗の心が『嘉瀬の奴踊り』を生んだものと思われ、当時の農民が言語に絶する苦難のあとなど、ふり返ってみることにする。

◎ 津軽新田開発と信政

大浦為信が津軽を統一したのは、天正十六年（一五八八）といわれる。それ以前の津軽平野は田圃といえよ今の藤崎町辺りまでで、それより以北は一つの部落もなく一面茫茫たる湿地帯であった。

このため新田開発は初代為信から始められ、信牧・信義・信政と津軽藩二二六年のながきに亘ってすすめられた。今日の津軽が穀倉地帯

に変貌したのも、そのおかげであるといえよう。なかでも四代信政は、津軽歴代藩主のうち、治山治水に最も力を入れ、その功績もあって藩政の「中興の英主」といわれ、元禄期『近世人鏡録』の「七人傑」の一人に数えられた。

信政は、寛文から元禄（二六六一―一七〇四）にかけ、五所川原・広須（西郡柏村）、木造・金木・俵元（五所川原）と困難を極めた津軽平